

狩猟とトリカブトの神

自然から得るものだけを糧として生活していたアイヌ民族の食料調達手段として、狩猟は重要でした。獲物は陸の熊や鹿、海のアザラシ、トド、セイウチ、ラッコ、オットセイ、



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター
調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレイ国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モントレイ校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

イルカ、クジラなどの大型動物から、狐、狸、ウサギ、カワウソ、テン、リスまで食用にできる動物全てといってもよいでしょう。それらの動物神から贈られた様々な毛皮は、和人や大陸との交易品としてヨーロッパの需要を充たしていました。明治以降は銃を使うようになりましたが、それ以前は猟師が弓で射るだけでなく、仕掛け弓などのワナを使ったり、動物の生態によって様々な猟の方法を用いました。クオナイという地名がありますが、これはku ((仕掛け) 弓) o (たくさんある) nay (沢) という意味で、その沢に仕掛け弓が多くかけられていたことがわかります。仕掛け弓は、木の弾力を利用するのですが、大型獣を捕獲する場合には、矢の先にトリカブト(アイヌ語ではスルク:surku)の根から作った毒が塗られていました。毒の調合方法は人それぞれに違い、他人に教えたりしない極秘事項だったのです。銃で狩りをするようになってから、トリカブトの毒を作る人もいなくなり、その製法も伝えられないまま絶えてしまいました。毒矢で捕獲した動物を食べることができたのは不思議ですが、毒は動物の体全体に回ったあと、矢が刺さったところに集まるのでそこだけ除けば安全だったそうです。トリカブトに関して、トリカブトの姉妹の神、ケレノイエ(kere接触するpもの(の体)noyeをよじる)、ケレノウルセ(kere接触するpもの(の体)がturse転倒する)のお話があります。トリカブトを採取するときこの女神達に敬意を表さず毒を作った男が狩りをしていても効果がなく、

獲物である神たちの怒りを受けて怪我をいたしました。これとは対照的に、人間に知恵を授けた神といわれるオキクルミが礼を尽くしてトリカブトを採取し、火の神にも祈って

作った毒は非常によく効き、沢山の獲物を授かりました。オキクルミはその御礼として、トリカブトの女神達に立派な御幣を奉納し、女神たちもそのおかげで位の高い神となったとのこと。この話から、アイヌの人々は植物を採取するときも植物を神として敬意を払っていたことがわかります。生活に役立つものは全て神(カムイ)としてその恩恵に感謝して利用していたので、アイヌの人々の生活は、言ってみれば朝から晩まで神々への儀礼によって成り立っていたと言っても過言ではありません。

狩りに関して興味深いことは、前に行ったときの自慢げな手柄話や、捕獲した獲物の頭数の話をむやみにしてはいけないことになっていたことです。以前に獲物を授かったことをむやみに吹聴することで、密かに授けていた事が明るみに出た結果、それまで加護していた神が怒って授けるべき獲物を他の人に授けてしまうからだそうです。人間の年齢についても、他人に話すことで、それを見守る神々が、いつの間にかそれほど十分生きたのならと、他者に目を向けることで、その人の人生が終焉することになるため、決して年齢を口外することはありませんでした。また特に火の女神はお喋りの傾向にあるので、火の傍で大事なことは一切言ってはならず、火の神から離れた屋外で話さなければなりません。神々に囲まれて暮らす生活には、なかなか厳しい決まり事が沢山あったのです。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大学北海道短期大学部(滝川市)で開催のベカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』(北海道教育委員会、2007、2008年)、『平成20~29年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~9』(北海道教育委員会、2008~2017年)等。